

平成29年9月9日(土)

老球の細道355号

## 発想のヒントはどこにでも

会津バスケットボール協会 室井 富仁

2009年ドイツ・チェコにおいてのコーチ研修で同行したバスケットボール家庭教師の会「エルトラック」社長鈴木良和氏の著書の一つに『バスケットボール「1:1」に強くなるトレーニングブック』(ベースボールマガジン社)がある。その中に剣豪宮本武蔵の言葉が掲載されている。

「観見の二つあり、観の目つよく、見の目よわく、遠き所を近く見、近き所を遠く見ること、兵法の専なり」。つまり、「近く(ボールマンディフェンス)を感じて(見て)、遠く(ヘルプディフェンス)を観る」ということ。宮本武蔵『五輪書・水の巻』「兵法の目付と云事」に載っておる内容をバスケットボールの1:1におきかえて解説してある。

早速、昔購入してちょい読みした『五輪書』(徳間書店)を書棚から取り出して再読してみた。そしたら今まで気づきもしなかった「1:1の戦いのヒント」が満載されているではないか。どこに目をつけて読んでいたのだろう。その中で、「水の巻・構え有りて構え無しのおしえの事」に私の未完成の感性が響いた。型にはまるなという教えである。

【構えがあって、構えがないという心得について。そもそも、太刀を一定の形に構えるということは、あるべきことではない。しかしながら、五つの方向(上、中、下、右、左のわき)に向けることを構えといえ、そのようにいうこともできる。これを構えがあって、ないというのである。

太刀を持つには、敵との関係により、その場所により、状態に応じ、どの持ち方をしようとも、すべて敵を切りやすいように持つことである。たとえば上段にとっても、場合によっては少しく下げれば中段となり、中段を必要に応じてやや上げれば上段となり、下段を時によって少しく上げれば中段となる。また、両脇の構えも、位置によって、やや中の方へ出せば、中段または下段となるのである。

このようなわけで、構えというものは、あつてないという道理となるのである。ともかく、太刀をとっては、どのようにしても敵を切ることが眼目である。(中略)

大きな合戦の場合にあてはめて見れば、陣列を組むことが構えに当たる。これもすべて合戦に勝つための手段である】

この文章をバスケットボールに置き換えて考察すると様々なヒントが得られる。ボールと刀を置き換えれば新たな視点でトリプルスレット(ボールマンの基本姿勢)を考えることができる。チームプレーにおいてはエンドラインスローインからのセットプレー。セットポジションを上へ上げ、下へ下げたり、右へ寄せ、左へ寄せることによって既存のプレーに変化を与え、相手チームを混乱させることができるかもしれない。

宮本武蔵の真剣による1:1の戦いの目的は人を切ること。バスケットボールの1:1の戦いの目的はシュートを入れること。この目的さえぶれなければ手段は臨機応変である。

専門的な視点でのみで考えていると限界がある。専門外の視点から改めてバスケットを考えて見ると発想のヒントがたくさん見つかる。平成7年福島国体時、日本の名コーチ森下義仁氏(元拓殖大学監督)に風呂の中で質問をしたことがある。「先生の愛読書は何ですか?」。師曰く、「『孫子の兵法』。バスケットの戦術のヒントがたくさんあるよ」。